

## 館長だより 第13号(令和8年4月)

些か遅くなりましたが、3月に実施あるいは完了した風土記の丘関係の事業についてお話しします。

### 石室公開を行いました

3月1日(日)には大日山35号墳の石室公開を行いました。大日山手前の園路分岐にある全体説明版のところに受付を設け、ボランティアの皆さんが7人程度の見学者を単位に、大日山と石室を案内しました(右写真。7人程度を単位としたのは、石室の大きさを勘案してのことです)。県外からの来訪者も含め、100人を超える見学者を迎えることができました。



令和8年度においては、通常は施錠して管理している石室の古墳公開は、冬場の12月と3月に予定しています。但し、それとは別に、石室の公開古墳を含む古墳ガイドツアーも3回予定しています。第1回のガイドツアーは6月7日(日)。ぜひご参加ください。

### 7年度の古墳群の整備

岩橋千塚古墳群では、毎年2基程度の古墳を選んで、その保存あるいは公開の環境を整える事業を継続しています。前回はA111号墳の保存修景整備についてお話ししましたが、今年はまだもう1基、大谷山17号墳の環境整備を行いました。



大谷山17号墳は2基の竪穴式石室をもつ円墳ですが、周囲の木の根の侵入や倒木の危険、土砂の流入など、複数の原因による環境の悪化が懸念されることから、石室を埋め戻して土を盛り、保存を優先する環境整備を行いました。整備に際しては、石室内に流入した土砂を丁寧に除去して状態を確認するとともに、図面を作成するなど、将来の保存活用のための資料も作成しています(写真上)。

A地区の園内道路を上ったところの天王塚古墳方向と将軍塚古墳方向の分岐に、総合案内板を設置しました（写真右）。これによって、旧小早川家住宅の手前で分岐する2本の園内道路が尾根筋に達するいずれの地点にも、案内板とトイレを用意することができました。



天王塚古墳の整備に目が向きがちですが、既に公開されている範囲においても、毎年少しずつですが古墳の保存整備や活用環境の整備・更新をして、古墳群の保存と活用の両面にわたる環境の向上を図っています。

3月には墳丘周辺の笹や草をかなり刈りましたので、園内の古墳がより視認できるようになりました。とくに将軍塚～知事塚～郡長塚を中心とした稜線上を辿る園路は、それら古墳群を縫うように続く径となっていて（写真右）、歩



きながら、前方後円墳を中心にして円墳や方墳が集中している様子がよく解ります。ときには稜線の路を歩いて、普段は隠れがちなこれらの古墳を見つけてやっていただ

きたいと思います。また、岩橋千塚古墳群の特徴の一つは多様な石室が混在しているところですが、笹を刈った今の時期なら開口している石室も容易にわかり、墳丘上からそれらの石室を覗くことができます（柵などの設備はありませんので、近づく際にはご注意ください）。右の写真（左側）はB134号墳の石室を覗いたもの、A2号墳（右側）は、奥にある覆屋の上から石室を覗けるようになっています



## 竪穴住居活用の一側面（研究の場として）

3月4日（水）、中久保辰夫（大阪大学大学院）・三舟隆之（立教大学）両先生を中心とする研究者と大学院生ら凡そ10人のメンバーで、竪穴住居内に復元した竈を利用して、古代の調理法に関する実験が行われました。



古代の調理については、料理の名称や材料名はわかるものの、その実態や調理法については謎の部分が少なくはありません。土器を用いた炊飯でも、土器についた煤や炊き汁の痕跡への理解から、炊き方について複数の説があるそうです。因みに風土記の丘でも“ふどきっず”の活動で土器炊飯をしてきましたが、その調理法は中久保先生たちの実験とは一部異なる方法（別説の方法）を採用しました（学説の当否とは別に、おいしいご飯が炊けました）。

風土記の丘を支える重要な学問分野は考古学・歴史学ですから、竪穴住居を利用した今回の実験は、風土記の丘が研究の場としても可能性をもつことを示したことになるでしょう。“ふどきっず”に代表される風土記の丘の活動の背景には、こうした学問研究と、それらに日々アクセスする研究者としての学芸員の活動があります。ひとつひとつは小さく地味なことですが、しっかりした研究に基づく情報を的確に伝える（收藏されたモノを通して新しい情報や理解を伝える）とともに、様々な活動を通して知識の体験化を図っていくのが、博物館・資料館の活動の基本になると思っています。

【閑話休題】職員の方から文旦をいただきました。  
埴輪たちも嬉しそうでした。



## 4月から長期休館になります

令和8年3月31日をもって、風土記の丘資料館は資料の公開・活用をいったん停止いたしました。4月1日からは新博物館の建設と現資料館の改修の段階に入り、令和10年度の途中まで休館となります（資料館を除く風土記の丘の園内は、いままで通りご利用いただけます）。リニューアル後の新規開館は令和10年度の後期を予定しております。

風土記の丘は、昭和41年度から文化庁が都道府県に呼び掛けて開始した事業で、地域の特性を示す遺跡が集中的に所在する地域を対象に、遺跡を周辺の自然環境とともに広域で保存し活用することを目的に実施されました。こうした施策の背景には、昭和30年代後半からの急速かつ大規模化する国土開発の進行と、それに伴う遺跡や自然の破壊が問題化していった社会情勢があります。

もとより人間の生活とそれを取り巻く自然環境とは切り離せない関係にありますから、両者を一体のものとして保存していくことは、生活の歴史を良好なかたちで総合的に保存・継承していくことにつながります。国の記念物（史跡・名勝・天然記念物）には、こうした問題意識からの対応が滲み出ている指定もありました。一例を示せば、北海道標津町の史跡伊茶仁（いちゃに）カリカリウス遺跡と天然記念物標津湿原の指定（ともに昭和54（1979）年）をあげることができるでしょう。

伊茶仁カリカリウス遺跡は低丘陵上に営まれた擦文文化期を中心とする大規模集落遺跡、標津湿原はその前面から海岸砂丘までの間に広がる湿原で、史跡と天然記念物の違いはあっても、隣接する地域を国の記念物として指定することで、この地域で長期間営まれた生活の痕跡と、その生活を支えた環境を保存し継承しようとしたものです。現在、指定地を含む630ヘクタールが標津町のポー川史跡自然公園として公開されており、入口に資料館、その背後から伸びる遊歩道が湿原と遺跡を結んでいます。



この指定の背景には昭和52（1977）年から文化庁が実施した広域遺跡保存対策調査研究事業がありました。広域の遺跡をできるだけ一体として保存していこうというものでしたが、実際には標津遺跡と標津湿原のように遺跡と自然を一体として保護した広域保存が行われた点には、風土記の丘事業以来ながれる記念物保護の思想を見ることができると言えるでしょう。写真右：春の伊茶仁カリカリウス遺跡。（残雪が住居跡を浮かび上がらせる、北海道らしい景観です）



話を風土記の丘に戻しましょう。

風土記の丘事業では、遺跡を整備するだけでなく、収蔵庫や資料館を設置して公開・活用にも資することが図られました。紀伊風土記の丘は、特別史跡に指定された岩橋千塚古墳群と、古墳群が立地する岩橋丘陵を保存するとともに、丘陵北麓に資料館を設け、旧柳川家住宅をはじめとする民家を移築して、遺跡と考古資料・民俗資料の保存と公開・活用を一体的に行う場として、昭和46（1971）年に西都原風土記の丘（宮崎県）・さきたま風土記の丘（埼玉県）に続く3番目の風土記の丘として開園しました。開園に至る過程で松下幸之助・西山卯三・浦辺鎮太郎ら昭和を代表する企業家や設計・建築家が関わったことは、紀伊風土記の丘を語る上で忘れてはならないことですし、松下幸之助に因んだ松下記念資料館（現在の資料館）は、モダニズムを基調としながらも、紀州青石を貼り張り付けた外壁や銅鐸を模した窓格子などの特徴的な意匠をもつ建築として、国の登録文化財になっています（令和4年登録）。リニューアルに際しては、こうした紀伊風土記の丘の歴史を継承する意味も込めて、現資料館を残して（内部は改装しますが）新館と機能を分担しつつ活用していく予定です。

開園以来54年間、風土記の丘は多くの利用者の皆様に支えられ、活動を続けてまいりました。とくに平成に入ってから、埴輪づくり・勾玉づくりや、民家を利用した生活体験、風土記の丘の植物案内などの企画を増やすとともに、ボランティアの方々の参加も得て、幅広い年代の方々にご利用いただけるよう工夫を重ねてまいりました。ふりかえると、風土記の丘はたくさんの方々との関係の中で成長してきたという感を新たにします。関わっていただいた多くの方々に、あらためて篤く感謝を申し上げます。

なお、資料館は休館いたしますが、民家や古墳群のある園内は引き続きご利用いただけますし、古墳のガイドツアーや植物観察、講座等の幾つかの企画も実施する予定です。ハニワづくり、まが玉づくりなど、子どもたちに人気の企画を「おでかけ博物館」として実施したり、収蔵品の他施設での展示や学校の授業へのオンライン支援もしておりますので、HP・SNS・チラシなどでご確認の上ご利用ください。